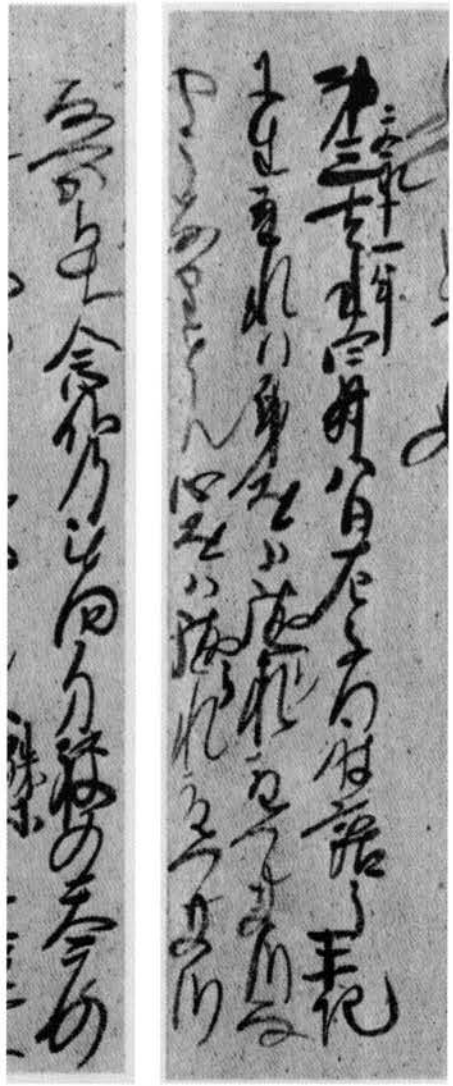
今月の御聖訓



文永十一年
第三去年四月八日左衛門尉語云、王地
に生たれば、身をば随られたてまつる
やうなりとん、心をば随られたてまつ
るべからず。念仏の無間獄、禅の天魔の

【撰時抄　全集二八七頁】

目　　次

今月の御聖訓
巻頭言 …… 菅野憲道　1
「選ぶ」ということは「捨てる」こと …… 菅野憲道　2
御書と日興上人〔200〕 …… 松田銘道　6
【御逮夜講演】「期待されている自分」 …… 大橋一法　8
読書案内「目の見えない精神科医が、見えなくなって分かったこと」 …… 松田銘道　15
父が遺したもの …… 原田栄子　16
大石寺の和尚 …… 20
恵日だより …… 21
8月・9月の行事　葉月詠草　恵日俳壇　訃報

表紙写真　撮影：菅野和幸氏　　題字：立正安国論より拝写

巻頭言

隠し食い相承

菅野 憲道

過日、「大石寺の和尚」という題名の童話があることを知り、図書館からコピーを送ってもらった。（本誌20頁参照）

読んでみると、大石寺の法主には他人には窺い知れない唯授一人の血脈相承があると主張しているのを揶揄したものと思われた。

すなわち、美味しい干し柿をもらった和尚さんが人に知られぬように独り占めし、こっそりと「隠し食い」するのと同じようなものだという。同じ時・機・国に居しながら人には通途の教えを説いて、唯一人だけは秘密裏に特別の法門を付属をするというような説は、既にして物惜しみ＝慳貪の罪に堕ちているという批判をふくんでいる。

大石寺の法主の職位をめぐっては、世俗的権力（代表権、人事権、財産権等）が集中し、世俗社会にも見ないほど独裁的な教団となっている。しかし血脈相承をめぐって時には法主を日蓮大聖人と同等のようにいいなし、絶対服従を求めながら、大正末年の日柱上人不信任事件のように、暴力的な圧迫をもって辞職を強いたり、寛永時代には十七代日精上人は十九代日舜上人へニセの相承を渡したり、明治にも現職の貫首が夜逃げし、数ヶ月間も行方不明になったり、相承もされないままに遷化される例など、歴史世界における血脈相承なるものはあるべき姿とはほど遠くして、タブー視して封印するしかないものとなる。

であれば、日興門流本来の『依法不依人』の宗綱に立ち返えって、封建的な階級社会の残滓でもある「法主だのみ」のような信仰はあらためるべきなのです。「御肉牙」等の縁起話と同様に現代にあってはとうにあらためるべきだったのです

日達上人が急逝なされた時、かなりの僧侶が御相承の儀が無かったことを憂いて、阿部信雄師が詐称したことを疑いながらも、何の確証もえられないまま、（余人は知る与わざる御相承ですから、真偽は阿部師しか知り得ないにもかかわらず）己れを偽り、さも見て来たように、「事実である」と断定し、「拝信する」などと競って阿諛してきた結果が、依法不依人の宗義と乖離し、一族の私物・私兵と化してしまった教団の姿ではないでしょうか。 裸の王様を諫めることすらできない現門下が、国を諫めるなどできるものではない。

「選ぶ」ということは「捨てる」こと

～～ 最善の道を選択する「智慧」を磨く ～～

菅野憲道

源立寺講報（平成5年4月号）より

朝暮に怠らず磨くべし

一、捨てるということ

我々はいつでも一つの事だけしかできません。たとえば今このお寺にいながら、一方で梅田のデパートにいるなんていうことはできません。

今日帰ったら、何をしようか、テレビを見ようか、本を読もうか、パチンコでもいこうか、仕事をしようか、買い物しようか、何を食べようか・・・、とにかくいろいろな事がある。同じテレビを見るのでも、歌か、ドラマか、教養番組か、スポーツか、映画か、ビデオか・・・、こうした小さな選択が日常を形づくっているわけです。

生きるという事は、いつでもいくつかの選択肢の中から何か一つの事を選びとる作業の連続でもあり、あとは全部捨てることだと思うのです。あれもこれもと欲張ってみても、最後は結局一つしかできない。

ちょっと見ると自分の行く手にいくつもの道があって、どれでも同じようなものに見えるのですが、本当に通れる道はただ一つ、あれもこれも通れるものではない。そして一度道を選んだらやり直しはきかないのです。

また最近のように、情報やモノがあふれている時代には、それぞれの器量に応じていかに「捨てる」かということが重要になっている。「シンプル　イズ　ベスト」等と流行語にもなってますが、余分なものを無秩序にあれもこれもと取り入れていたら、たちまちモノや情報の洪水に溺れてしまうでしょう。

それと同様に、我われの日常の行動でも、限られた人生ですから、「捨てる」ということが大切だと思います。

もし我われが、日常から思いきってよけいなことを切り捨てて、本当に大切なこと、真に必要なことを積み重ねていくなら、大変有意義な人生になるのではないでしょうか。

ましてやこの信心においては、

「日蓮は広略を捨てて肝要を好む」

と仰せられて、法華本門は、爾前の権教を捨てて一代聖教の肝要たる南無妙法蓮華経を直ちに受持信行するということを宗旨としております。宗教はみな一緒だなどと知ったかぶりして、あれもこれも雑えて信仰するのは大変な誤りなのです。

二、知慧の動き

ところで、このように我われの日常は小さな選択の繰り返しですが、どうしてその道を選んだのかを考えると、ほとんどの場合はただ何となく決めている。理屈を後からつけますが、本当ははっきりした動機や理屈などなくて、なんとなく行動している場合が多い。・・・そこに智慧というものの働きが重要になってくる。

例えを食事にとってみましょう。今日の夕食に何を食べようかという場合、何を尺度に選ぶのか、栄養か、値段か、おいしさか、健康のためか。また作る手間か、材料か、季節、そのときの気分等などいくつもの基準があるわけです。これがさらに夫にあわせるか、子供にあわせるか、自分にあわせるかによってまた違ってくる。

このように一つの判断の中にはいくつもの基準があり、これを無意識のうちにきっちり整理し、柔軟自在に最善の道を選択している状態を、〝智慧が働いている〟というのでしょう。

それが、智慧がくもっていると、判断の基準を間違える、大事な事と小さな事の優先順位を誤る、一つの基準にばかりこだわる、ぼんやりして情性に流される等々・・・。そのために体調を崩して後悔したり、病気になって苦しんだり、寿命を縮めることさえもある。そのうえ、飲食が原因で病気になってもなお食養生ができないというようなことはどこでも見受けられることです。

三、智慧を磨く

これは、愚癡という暗闇のような無知の状態か、智慧があっても、虚栄心とか欲望等が強く働くために迷いに陥り、誤った選択を繰り返してしまう。この事を仏教では煩悩と業というのです。煩悩や業によって智慧が曇って愚癡になり、誤った判断や行動が不幸の種をまき散らすことになる。

智慧を磨き、明るい澄んだ心を持っていればスースーッと正しい道を選んで行動できるから大変能率がいい。ところが、智慧が暗いと、すぐ一つの事に執著してなかなか足が前に進まない。どうしようどうしよなんて迷って、何もしないでくたびれる。あるいはかっこをつけてバカな方角にすすみ、結局遠回りして後悔する。

そこで仏教は〝煩悩→業→苦〟の悪循環を断ち切り、真理と智慧と慈悲の具現をめざすのです。我われが法華経の信心をするのは、この智慧を磨いて、最上の人生を送ることなのです。

いま拝読しました『一生成仏抄』に、

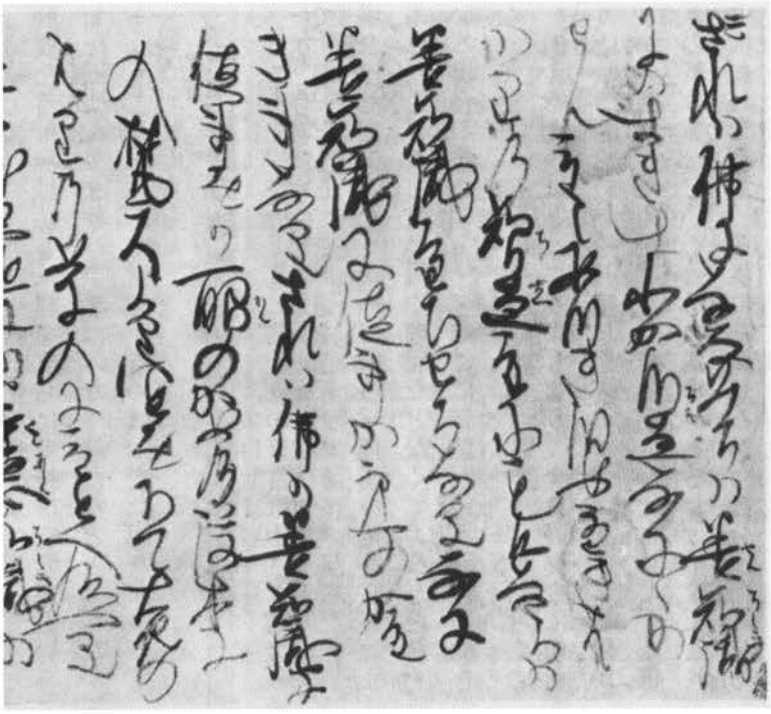
「只今も一念無明の迷心は磨かざる鏡なり。これを磨かば必ず法性真如の明鏡となるべし。深く信心をおこして日夜朝暮にまた怠らず磨くべし。何ようにして磨くべし。ただ南無妙法蓮華経と唱えたてまつる、これを磨くとはいうなり」

と仰せられております。

何故に法華経を信ずることが智慧を磨くことになるのか？それは、法華経は、仏様の本意を尺くされた究極の経説であり、この正法を正直に信ずることが、同時に我見や名聞名利を捨てることに通じるからです。

『持妙法華問答抄』には、

「ただ須く汝仏にならんと思わば、慢のはたほこを倒し、忿りの杖を捨て、偏えに一乗に帰すべし、名聞名利は今生のかざり、我慢偏執は後生のほだしなり」



されば佛になるみちは善知識にはすぎず。わがちえなににかせん。ただあつきつめたきばかりの智恵だにも候ならば善知識たいせちなり。而に善知識に値事が第一のかたき事なり。されば佛は善知識に値事をは、一眼のかめの浮木に入、梵天よりいとを下て大地のはりのめに入にたとへ給へり。

とあって、うぬぼれや我欲を捨ててこそ正信の道に入れることを説いております。そして、小我を捨てて妙法に帰命するところに、自然に智慧が磨かれるわけです。

たとえば、一番基本的な修行である勤行にしても、朝夕御本尊様に向かい、一心にお題目を唱える中に、自然に「仏恩報謝の心」「先祖への御供養」「一切衆生への利他平等の心」「懺悔滅罪の心」が養われます。

すなわち、一心に妙法を信ずる一念は法界に一如して清浄となり、我執や妄想、利己主義的な生命を冥伏し、清浄の一念は諸法の実相を写す明鏡となるのです。

ここに本当に自分を生かす道、「一生成仏の信心」「六根清浄の功徳」があるのであります。

四、世法と信心

それでは、信心をしていれば、世間のことを学んだり、修行しなくていいのか。信心だけが価値があって、世間のことは価値がないのかというと、念仏ならいざ知らず、法華経の教えはけしてそうではありません。

正しい信仰を持ち、智慧を磨くことによって、はじめて、現実世

界の生活や産業、思想、文化、芸術等のあらゆるものが真に生かされてくるのであります。

「俗間経書、治世語言、資生業等、皆順正法」（法師功徳品）といって、正しい法華経の信仰は、その人の生きざまに、すなわち職業、事業、家庭生活、社会活動や趣味などの人生のあらゆる場面を通じて発揮されるのであります。

五、善知識大切なり

ところで、ついでに創価学会の誤りを指摘しますと、最後には「御本尊と自分だから、そんなことは関係ない」等と言って、御本尊に向かって題目さえ唱えていれば、他のことはどうでもいいというようなことを言って耳を塞ぐ人がおります。果たしてそうでしょうか？　これは論旨をすり替えているのですが、それは置いておくとして、いくらお題目を唱えても

「いかに法華経を信じたもうとも謗法あらば必ず地獄におつべし」

との仰せのように、片方で謗法の組織に与同していれば全く功徳はありません。それは、

「仏法を学すれども、或は我が心のおろかなるにより、或はたとい智慧はかしこきようなれども、師によりて我が心のまがるをしらず。仏教を直しく習いうることかたし」

と『三沢抄』にございますが、最近の新興宗教の会員のように、見事に洗脳されて「この世の終わり」とか「復活」等といういい加減な妄想を信じ、金集めの手先になってしまう。また最近の学会や宗門のように、誤った指導によってその信心が曲がって、池田氏や阿部師に盲目的に服従する。恐ろしいことです。

口では「大聖人」と言っても、実際には法主や先生を絶対化し、カリスマ信仰に堕して、依法不依人の誡めに背いている。彼ら上人や先生方は外見はいかにも聖人賢人のように振る舞っても、実には欲深く、慈悲の心もなく、罵り合う、嘘と作りごとで塗りかため、信者の奪い合いをする姿は正しく御書に説かれた狗犬の僧と食法餓鬼の姿・・・、六根清浄どころか人煩悩魔の盛んな姿をさらしているわけです。そしてこのような邪見の師について信心していると、知らず知らずのうちに煩悩の病が重くなり、独善、高慢、愚癡、無慈悲、狂信といった症状を呈することは驚くばかりです。

すなわち、正しい信心修行は正師についてこそ可能であって、正師とは別して大聖人であり、総じて日興上人已来、宗祖のご精神を受け継ぐ本宗の正信の僧であります。

正師について信行学に励んでこそ、信仰の内容（法体）を感得して受持できるのであり、唱題という形だけ真似をしても、正師を取り違えてはかえって邪法になってしまいます。

どこまでも本師日蓮大聖人に随従して信心修行に励んでこそ、真の智慧を磨くことになることを、深く肝に銘ずべきであります。

「仏になる道は善知識には過ぎず。我が智慧なににかせん。ただあつきつめたきばかりの智慧だにも候ならば善知識たいせちなり。しかるに善知識に値う事が第一のかたき事なり」

【御書と日興上人（二〇）】

「立正安国論」書写と「安国論問答」（一三四）

松田銘道

前回は、大黒喜道師が「宗祖ご一代における妙法五字の内容的な変容について」（『興風』三〇号）との論文で、「五、上行菩薩の自覚を獲得する過程での要素の付加」との項目にて、妙法五字に三つの要素が見いだせることについてみてきました。今回は、同論の「六、身延入山前後の要素の付加」の項目についてみていきます。

この項目では、妙法五字に❶「広略を捨てて肝要を取る」、❷「逆謗を救助する要法」、❸「一大秘法という呼称」、以上の三つの要素が付加される状況について考察しています。

❶は、文永十一年（一二七四）五月二十四日前後半年の『法華取要抄』の、

疑って云く、何ぞ広略を捨てて要を取るや。答へて曰く、玄奘三蔵は略を捨てて広を好む、四十巻の大品経を六百巻と成す。羅什三蔵は広を捨てて略を好む千巻の大論を百巻と成せり。日蓮は広略を捨てて肝要を好む所謂上行菩薩所伝の妙法蓮華経の五字なり。

とのご文。❷は、文永十二年（一二七五）三月十日の『曾谷入道殿許御書』の、

夫れ以みれば重病を療治するには良薬を構索し、逆謗を救助するには要法には如かず。

とのご文。❸は、同じく『曾谷入道殿許御書』の、

大覚世尊仏眼を以て末法を鑑知し、此の逆謗の二罪を対治せしめんが為に、一大秘法を留め置きたまふ。

以上のご文に示されている、と指摘しています。

❶の「肝要」に関しては、前年の四月二十五日の『観心本尊抄』でも、

・本門の肝心南無妙法蓮華経の五字
・寿量品の肝心たる妙法蓮華経の五字
・今の「遣使還告」は地涌なり。「是好良薬」とは寿量品の肝要たる名体宗用教の南無妙法蓮華経是れなり

と、「本門の肝心」、「寿量品の肝心」、「寿量品の肝要」が示されているものの、『法華経』の広略を捨てて肝要の五字の題目を撰択するとの強い取捨の意志を明確に示されるのは、この「法華取要抄」がその嚆矢」であり、『観心本尊抄』と『法華取要抄』とでは、「取捨の意志」に相違がある、との見解を示しています。

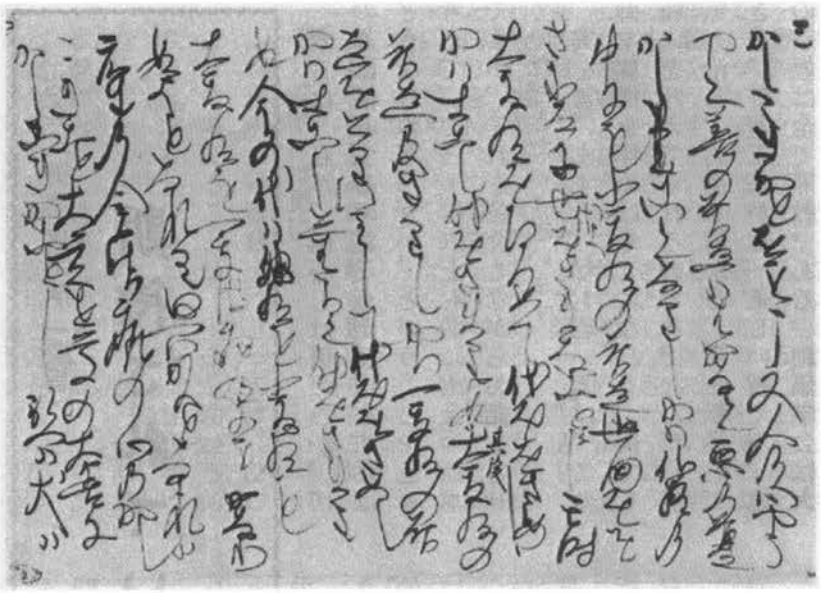
そのことは、翌、建治元年（一二七五）七月十二日の『高橋入道殿御返事』に、

我が滅後一千年すぎて像法の時には、薬王菩薩・観世音菩薩等、法華経の題目を除きて余の法門の薬を一切衆生にさづけよ。末法に入りなば、迦葉・阿難等、文殊・弥勒菩薩等、薬王・観音等

のゆづられしところの、小乗経・大乗経並びに法華経は、文字はありとも衆生の病の薬とはなるべからず。

と、「法華経」も末法の「衆生の病の薬」とはならないとの表現。

また、建治二年（一二七六）初頭の『滅劫御書』に、



『滅劫御書』（ご真蹟十紙断存・大石寺蔵）。第三紙十一行目に、「今の代は外経も、小乗経も、大乗経も、一乗法華経等もかなわぬよ（世）となれり」と、末法は『法華経』すら叶わぬ世、と規定されている。

今の代は、外経も小乗経も大乗経も、一乗法華経等も、かなわぬよ（代）となれり。ゆへいかんとなれば、衆生の貪・瞋・痴の心のかしこきこと、大覚世尊の大善にかしこきがごとし。

と、末法は「一乗法華経も通用しない世」との表現。

さらに、弘安元年（一二七八）四月一日の『上野殿御返事』に、

南無妙法蓮華経と申すは法華経の中の肝心、人の中の神ごとし。（―中略―）正法・像法には此の法門をひろめず、余経を失はじがためなり。今末法に入りぬれば、余経も法華経もせんなし。但南無妙法蓮華経なるべし。

かう申し出だして候も、わたくしの計らひにはあらず。釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌千界の御計らひなり。此の南無妙法蓮華経に余事をまじへば、ゆゆしきひが事なり。日出でぬればとぼしびせんなし。雨のふるに露なにのせんかあるべき。嬰児に乳より外のものをやしなうべきか。良薬に又薬を加へぬる事なし。

と、末法には「余経も法華経も無用」との表現。

以上の三書には、「取捨撰択の要素の最終的な姿が繰り返し繰り返し強調されている」と指摘し、その取捨撰択が「『本尊問答抄』の題目本尊論へと繋がっていくものと考えられる」との見解を示しています。

このように、文永十一年の『法華取要抄』での「妙法五字の取捨撰択」は、弘安元年の『本尊問答抄』での題目本尊論として示されている状況について考察しています。

以上の考察とともに、宗祖が文永十一年以後、『法華経』から「肝要（肝心）の妙法五字」の選び取りは、末法の衆生への「病の薬（良薬）」が、「大覚世尊の善（「法華経」）」なのか、それとも「妙法五字」なのか、その明確化であったと指摘できます。

お会式御逮夜講演（要旨）

期待されている自分

源立寺執事　大橋　一法

本日は、私が、信心とは何だろか、何の為に信心するのだろうか、信心すればどうなるのだろうか、ということを色々考えていて三十年以上も前に出会った本ですが、それを紹介しながらお話をさせていただきたいと思います。

実を言いますと、私も若い頃は、この御本尊様を拝めば幸せになれる、何でも願いを叶えてくれる御本尊様なんだ、病気も治る、お金も儲かる、宿命転換もできる、日蓮正宗が唯一正しい教えで、他の宗教は全て邪教である、創価学会は大聖人の教えを広宣流布する団体であると思っておりました。

しかし覚醒運動が起こって、そういう考えが根底から崩れ、では信仰とは何だろうか、大聖人の説かれた教えとは一体どういうものなのだろうか、と考えなければならなくなったわけです。

話の結論から申しますと、人はどう生きるべきか、どう振る舞うべきか、一般的な望みが全て断たれたとしてもその時にどうするか、そういう時にこそ導いてくれるものが本当の信仰でなくてはならない、と思うようになりました。

一般的に、信心し拝もうと思うのは、祈れば願いを叶えてくれたり、自分の罪を消して救ってくれ、天国や浄土に導いてくれる、奇跡でも起こすことが出来る宗教がいいと思うものかも知れません。

しかし私たちは、この思い通りにいかない、苦しみばかりだと思える世界で強く生きていくしかありません。だから私達は、そういう世界で人間としてどう生きていくべきなのか、それを学び、そういう生き方をするために信仰するのだと思うのです。

私がこういうふうに考えるようになったのは、『夜と霧』という本を読んでからです。この本から私は、人間というのはこんなにも強くなれる、本当に素晴らしい力を持っているということを教わりました。

《収容所での生活を書いた心理学者》

この本は、第二次世界大戦でナチスドイツが行ったユダヤ人狩り、組織的集団虐殺について書かれている本です。

その被害者となった著者（心理学者のビクトール・E・フランクル教授）が収容されたアウシュビッツ収容所だけでも三〇〇万人が殺され、総計すれば八〇〇万人とも一二〇〇万人に達するともみられるそうです。その収容所に収容されていた者が、それもどこにでもいる平凡な人が、そういう中で何を考え何を行ったかが書かれていました。

収容所の生活は悲惨の一言です。

一日の食べ物は、一リットルのスープと三〇〇グラムのパン。

三段ベットの一段（横二メートル縦二メートル半の広さ）の所で九人が寝なければならず、上を向いて寝ることすらできなかったそうです。横向きになるにしても枕がないので肩が痛くなり、腕を枕代りにしようとしても腕は曲げられず、結局禁止されている糞尿や泥が付いている靴を枕代りにするのです。

作業の時も、着の身着のままの姿で零下二十度であろうが働かされ、靴が自分の足に合わない者は裸足です。凍傷になったら指を抜かれる。

仲間が死ねば、死を悲しむよりも、自分の服や靴よりましかどうかを気にし、少しでもましならそれを取って使う……。

そういう、何一つ世間的な望みなど叶うはずのない、人間性まで失いそうな生活です。

しかし著者はこのように言っておりました。以下要約して紹介していきたと思います。

《人間としての尊厳を守る人》

「この、人間としての誇りをすべて捨ててしまわなくてはならないような強制収容所でも、たとえ稀でも、精神的豊かさを求める人がいたことを忘れてはなりません。そのような人はこのような環境の中でも、肉体的には確かに苦痛を感じていても、精神の自由と内面的な豊かさへと逃れることができました。そして、たとえその人が繊細な性質の人であっても、身体の頑丈な人よりも収容所生活を耐えられたのです。」

そしてまた、

「収容所に収容された人を心理学的・精神病理学的に説明すると、結局人の心は環境に左右されるという印象を与えます。しかし本当にそうでしょうか。このことについて私達は、全ての自由を奪われるような状態に置かれても、人は人間としての尊厳を失わず、環境に流されない自由な態度、精神を保つことができると、経験上からも理論的にも断言できます。

収容所生活を経験した人は誰でも、優しい言葉をかけ、また最後の一片のパンを与えて通って行った人を知っています。そのような英雄的な実例は決して少なくなかったのです。

収容所などでは、人から一切の権利を取ることができるかもしれません。しかしたった一つだけ、そういう状態に置かれてもどういう態度をとるかという人間の最後の自由は、誰も取ることはできないのです。」

私はこれを読んで、日蓮大聖人、そして日蓮大聖人の説かれる法華経の信仰を貫き通した熱原の二十名もの農民達のことを思いました。

念仏を信仰する時の権力者から、不当に捕縛投獄され、法華経の信仰を捨てて念仏を信仰するならば許してやると言われた農民たち。しかしそんな迫害に屈せず法華経の信仰を貫き、終には主謀者と

して三人が斬首されるという結果になったのです。

まさにこれは、この本に書かれている、精神の自由を守り抜き、内面的豊かさを求め抜くことではなかったでしょうか。

大聖人は

「王地に生れたれば、身をば随えられたてまつるやうなりとも、心をば随えられたてまつるべからず」（撰時抄　全二八七頁）

と仰せです。

国王が支配する土地に生まれたのだから身はどうしても従えさせられます。しかし私の心までは従えさせることは出来ませんよ、正しいと思うことはどんな権力、圧力にも曲げませんよという宣言なのです。

「父母の頸を刎ねん、念仏申さずわ。なんどの種々の大難出来すとも、智者に我が義やぶられずば用ゐじとなり。其の外の大難、風の前の塵なるべし。」（開目抄　全二三二頁）

とまで仰せられるのです。

ものすごい決意だと思います。これこそが、いかなる人も「人間の最後の自由を取ることができない」ということではないでしょうか。

《この世は苦であると説く仏教》

よく考えてみますと、私達にとってこの世の中で思うようになるものは何一つないように思われます。一番頼りにしている自分の身体にしても、歳をとると、目が見えにくい、耳が遠くなった、身体が思うように動かないなど、思い通りになりません。まして、他人や世の中が思い通りになるはずがありません。

でもたった一つだけ、この世の中に自分の思うようになるものがあります。それが、自分の意志です。もしこの意志さえ外からの圧力に負けて曲げてしまったならば、世の中に自分の思うようになるものが本当に何一つ無くなってしまうのです。

正しいと思うことはどこまでも貫く、それが私達に残された唯一の自由だと思います。それを教え、実行されたのが日蓮大聖人だと私は思うのです。

そして、それを自分が実行するだけではなく、底辺の人達ともいえる農民たちが実行してみせたのです。これを見て日蓮大聖人が、自分の生まれてきてやるべき事の目的を遂げた（出世の本懐を遂げた）と宣言されたことは頷けるのではないでしょうか。

しかし、人情として、悩みを解決したい、病気に負けない丈夫な身体になりたいと願うのは当然だと私も思います。

確かに信仰を持つことによって病気が治ったり、商売が上手くいくこともあります。大聖人も「但し又法華経は今生のいのりともなり候なれば」と仰せです。しかし信仰は決して病気のためでもお金のためではありませんよというのが大聖人のお考えのようです。

でも私たちは、目先のことに心を奪われやすい欠点があります。それだけではなく、功徳だ現証だと言って、そういう目に見える結果が正しい信仰の証明のように言ってきたのではないでしょうか。

「今生のいのりともなり候」の「とも」に注意していただきたいと思います。

病気にならない丈夫な身体ということで、この本にはこういう話もありました。

「収容所生活で一度も歯を磨くことができず、明らかな栄養失調にもかかわらず、以前の時よりもよい歯と歯ぐきをしていました。また半年間も同じシ

ャツを着て、最後はシャツともいえなくなり、水道が凍って一度も洗えず、身体中汚れて傷だらけであっても、一度も傷は化膿しませんでした。また素裸で水に濡れたまま晩秋の寒さの中戸外に立たされても、翌日になって私達の中のだれも鼻風邪ひとつひかなかったのです。」

だからといって、収容所の生活の方が人間にとって丈夫な身体を得るのに良い環境だなどと考える人はいないでしょう。

さてそこで問題なのが、内面的自由、精神的豊かさを失わない強い人間になるにはどうしたら良いかということです。

我々にとっては、どうしたら熱原の農民のように、強い信念、信仰心を持てるようになれるのか、どういう努力をしたら良いのかということです。もう少し『夜と霧』を読みながらそれを考えてみたいと思います。

《どう生きるか模範をしめす人》

まずこの本に、

「内面的に強くなるためにはまず未来に目的を持たなければなりません。ニーチェが『なぜ生きるかを知っている者は、ほとんどあらゆるどのような状態にも耐えられる』と言っているのがそれです。囚人が現在のみじめな状態に耐えるために、囚人に『なぜ生きるか』という目的を意識させなければなりませんでした。そしてこれをするのに言葉よりももっと有効なものがありました。それは模範ということです。模範的な人の影響は言葉よりも偉大だったのです。」

とあります。未来に目的を持ち、なぜ生きるかを意識することが必要だと言うのです。

日蓮大聖人は迫害を受けるたびに、自分は正しいのだろうか、正しい事をしている自分がなぜ迫害をうけるのだろうかと考えられています。それは、自分の生まれて来た目的は何なのか、自分は何をすべきなのかという、自分の生きる目的を考えられたということでしょう。

大聖人は、末法の衆生はこの妙法蓮華経と唱えて成仏すべき者達だという自覚から、母親が赤子の口に乳を含めるように、一切衆生の口に南無妙法蓮華経と唱えさせること、ただそのことが自分のやるべきことであると考えられ、生きてこられたのです。

そしてその日蓮大聖人の模範にならって信仰を貫き、自らが後世の人の模範となったのがあの熱原の農民達なのです。

末法においては二種類の人がいます。法華経を信仰する人と、信仰しない人です。収容所の囚人でも二種類の人がいたようです。普通の囚人と「カポー」と呼ばれる囚人です。

「カポー」というのは、囚人を取締るために囚人の中から選ばれた者でした。一般の囚人が餓死している中でカポーはまったく不自由な生活をせずにすんだそうです。そしてこのカポーは、収容所の監視兵よりも手厳しく、本来は仲間である囚人を苦しめたのだそうです。

皆が皆そういう立場になれるわけはありません。今の苦しみから脱れるために自分もそっち側の人間になりたいと願ったとしても、そうなれるのは選ばれたほんの一握りの人、権力に負けてしまい、仲間を苦しめる人になるということなのです。

決して皆んなが「カポー」のようにはなれないということ、なってはならない、そこには人間としての正しい振る舞いや、

幸せなど無いということを自覚することが大切なのではないでしょうか。

だから私達も先ず、生活の目的、人として正しい生き方、振る舞いという目標を持つ必要があるということです

しかし、その目標を持つと言っても、収容所からは出られないのです。私たちはこの苦しみに満ちたこの世から逃げることなど出来ないのです。

ではどう考えればいいのでしょうか。

《生きる意味の見方を変える生活》

ここからが私が最も紹介したいところです。

この本にはこう書かれています。

「何の生活目標も持たない人は哀れです。頑張り通す何の意義もなくなり、このような人の典型的な言い方が、『私はもはや人生から何も期待できない（これ以上生きてたって何もいいことはない）』です。しかしここで必要なのは、生きる意味について見方を変えることなのです。つまり、人生にまだ何が期待できるかではなくて、残った人生が私達に何を期待しているかと考えることなのです。そして、理屈や口先だけではなく、正しい行動によってそれに答えなければならないのです。それには、人生が各人に与えた使命を果すことであって、毎日の行動の責任を持つという以外にはないのです。」

とあります。

これを私達信仰者に当てはめるならば、信仰に何を期待するかではなく、残った人生、我々はどのように生きるのか、どのように信仰することを期待されているのか、自分の果たすべき使命は何か、信仰者として如何に生きるべきか、ということを考えるということになるでしょう。

今まで私達は、期待するのが信仰だと思っていたのではないでしょうか。しかし今私達に本当に必要なのは、期待する信仰から、期待されている信仰へと意識を変えることのようです。私達はなぜこの世に生を受けたのか、私達の使命とは何か、私達は何を期待されているのかを考えなければならないと思います。

《期待されているという生活》

期待されるということで、或る本にこんな話がありました。アメリカで貧しい生活をしているというとまず挙げられるのは黒人とユダヤ人だそうです。しかし同じ貧しい生活をしていても、黒人の中からは犯罪者がでる割合が高く、ユダヤ人からは知識人や芸術家がでる率が高いというのです。それはなぜかというと、ユダヤ人は先祖に誇りを持ち、家名を汚さないということを小さい頃から教えられ、家名をあげる使命があることを子供に教えるというのです。それに対して黒人は、奴隷としてアメリカに連れてこられ、先祖に誇りを持てないというのです。それがそういう結果として表われたというのです。これなども先程のことと同じです。同じ貧しい生活をしていても、一方は期待する生活を送る。しかし期待通りにならなければやけになる可能性が大きい。もう一方は、期待されている人生を送るわけですから、その期待にそうように最後まで努力するということでしょう。

私達日本人も昔は「家」を大切にし、家名を汚さないということを教えられたものですが、最近はそんなことを言わなくなったようです。反対に、人が見ていなければ悪いことをしてもかまわないなどという考えが強くなったようにすら思

えます。昔は、「かくれて悪いことをしてもお天道さんが見てるんですよ、御先祖様が見てるんですよ」なんて言ったものですが、それがなくなってしまったようです。

もう皆様には子供さんやお孫さんがおられると思いますが、先祖の目、法華経の信仰者として振る舞われた大聖人の目を意識した生活をするということを教えていって頂きたいと思います。それには、模範を示すということが重要だという事です。口うるさく、ああしなさい、こうしなさいと言うのではなく、自分が、先祖の目、大聖人の目を意識した生活をし、自分は法華経の信仰者であるという自覚と誇りを持って模範を示すということが大切なのではないでしょうか。

《死や苦しみの意義を意識した生活》

そして本には更に、

「収容所にいる私達にとっては、このように考えることが、生命が助かる何のチャンスもないような時にも絶望しない、たった一つの道でした。そして私達にとって重要だったのは、死を含んだ生活の意義、苦悩と死を含んだ全体的な生命の意義を考えることだったのです。」

「私達に期待されていたのは、犠牲も意味をもつものであり、哀れに苦しまないで、誇らしげに苦しみ死ぬということがあることを知ることだったのです。」

と言っているのです。

「苦悩と死を含んだ全体的な生命の意義」、つまり私たちにとっては「苦と死を含んだ信仰の意義」を考えるということでしょう。

まさにこれが「煩悩即菩提」「生死即涅槃」ということだと私は思うのです。煩悩を持ったままということは、苦しみを受け入れてということです。煩悩によって、あるいは死によって苦しみが起こるわけですから。

この世の中は苦しみの世の中であり、信仰によってその苦しみから逃れることを目標にするのではなく、それを受け入れ、その上で自分達の生き方を考え、「哀れに苦しまないで、誇らしげに苦しみ生き抜く」という生き方、そういう信仰があるのだということを考えることではないでしょうか。

まさに大聖人の御一生は、

「但日蓮一人計り此の事を知りぬ。命を借みて云はずば国恩を報ぜぬ上、教主釈尊の御敵となるべし。是を恐れずして有のままに申すならば死罪となるべし。設ひ死罪は免るとも流罪は疑なかるべしとは兼て知つてありしかども、仏の恩重きが故に人をはばからず申しぬ」（一谷入道御書　全一三二八頁）

というものでした。自分はどうしたいとか、どうなって欲しいとかではなく、どう生きなければならないかを考えられ、流罪・死罪を覚悟の御一生であられたということです。

そして、

「我等現には此の大難に値ふとも、後生は仏になりなん。設へば灸治のごとし、当時はいたけれども、後の薬なればいたくていたからず。」（聖人御難事　全一一九〇頁）

と仰せられ、終には、

「経文に我が身普合せり、御勘気をかほればいよいよ悦びをますべし」（開目抄　全二〇三頁）

と仰せられます。法華経の行者がなぜ難を受けるんだろうという哀れに苦しむ

気持ち、難を受けるのは嫌だという気持ちではなく、法華経の行者だから難を受けるんだと、誇らしげに難を受け苦しむのだという意識に変えたのだと申せましょう。

《法華経の信仰者としての生活》

諸法実相抄には、

「日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば、釈尊久遠の弟子たる事あに疑がはんや（中略）ともかくも法華経に名を立て、身をまかせ給うべし」（全一三六〇頁）

とあります。

日蓮の生き方を人として本当の生き方であると思うならば、あなたも、釈尊から末法という時代に法華経を弘めることを期待された地涌の菩薩なんだと考えなさいということです。

私達も法華経の信仰者である、地涌の菩薩なんだという誇りを持ち、これから先、自分自身の生き方を汚さないよう、何を期待されているのか、それをよく考えなければならないと思います。

でも、そういう生き方が出来るのは特別な人で、皆んなが皆んなそんな力があるわけじゃないと思うかも知れませんが、この本にこうありました。

「このような考えを、現実離れしていると考えてはなりません。確かにほんの少しの人だけが収容所で内面的な自由を知っていたのかも知れません。しかしそれがたった一人であったとしても、それは、人間がどんな環境であっても精神的に一層強くあり得るということを証明するものなのです。しかもそのような人が大勢いたのです。」

例えばどういう人がいたかと言うと、

「私には収容所での若い一人の女性の死が心に残っています。その女性は、もういくらも生きられないことを知っていました。それにもかかわらず彼女は、明るく『私をこんなひどい目に遭わせてくれた運命に感謝しています』と言っていました。そして『以前の何不自由ない甘やかされた生活のままだったら、これほど真剣に精神的な豊かさを求められなかったと思います』と言ったのです。」

本当にこんな人がいるんだと私は驚きました。

大聖人も内面的自由、精神的豊かさを求められ、そして熱原の農民達は身を以ってそれを実行されました。それは、私達にもそういう力が備わっていて、そう成り得るという証明だということです。

普段の私達は、恥ずかしながらここまで切羽詰まった生活をしていないでしょう。弱い、一見どうしようもないような私達だけれども、その奥にはこんなにも素晴しい力が備っているんだということを疑わないことが大切なのだと思います。

まだまだ私達には、自分達にも分からない素晴らしい力があります。そして、その力を発揮させてあげようと、この本のように極端ではないにしても、法華経の信仰者として立派に振る舞うことを期待して見守っていて下さっていると考え、その期待に応えようと努力する、それが大切なのではないでしょうか。何しろその力が私たちにもあるのですから。

これから先、先祖の目、日蓮大聖人の目を意識し、その期待に応えなければならないという私への戒めとともに、皆様にもそのような生活をされることをお願い致しまして、私の話を終わりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

著者は、医学部五年生の時に、徐々に視野が狭まる病を患っていることが発覚。三二歳で完全に視力を失いつつも、精神科医として日々活動している。

そのことに注目したＮＨＫ北海道が、昨年、『ぼくだからできること～美唄・全盲の精神科医の日々～』とのタイトルで放映し話題となった。

本書は、視力を完全に失ってから十年以上にわたり、心の様々な病を抱えた人たちと日々向き合ってきた精神科医者が、「見えていた頃の生活」と「見えなくなってからの生活」の、二つの相異なる世界について語っている。

第一部では、

見えないからこそ、見えないもの。

見えないからこそ、見えるもの。

と、視力を失ってから気付いた、見えるものと見えないことに関して、

・音が見せてくれる素晴らし世界。

など、目が見えない世界は、意外にもカラフルで、真っ暗な世界ではないなど、十六のエピソードを通して語っている。

第二部では、

見えるからこそ、見えるもの。

読書案内

松田銘道

福場将太著

「目の見えない精神科医が、見えなくなって分かったこと」

サンマーク出版

定価一四〇〇円

見えるからこそ、見えないもの。

と、視力だけに頼っていると、見ているつもりでも見えていないことに関して、

・ＳＮＳって、見る必要がありますか？

と、ネットやスマホなどの情報を求めすぎて、本当に必要なものは何かが見えなくなっていることなど、十七のエピソードから語っている。著者は「はじめに」、

もしあなたが目の見えている人なら、視覚に頼るあまりに見えなくなったものを見つめ直すガイドブックに。

そして、もしあなたが私と同じように目の見えていない人なら、頼りたい視覚がなくても希望を見つけられるガイドブックに。

との想いを込めている。実際、三十三のエピソードから、一歩立ち止まって見つめ直す空間が生まれたり、見慣れた風景が違って見えたりなど、見ているのに見えていなかったことに気付かされる。

そのことは、第三部で、

もう一度目が見えるなら。

と、「夜空の星座が見たい」など、もう一度叶えてみたい希望を二十二例あげていることからも感じることができる。

父の遺したもの

原田栄子

源立寺講報（平成5年4月号）より

先日の法華講総会において所感発表された平井勝男さんのお姉さん（原田栄子さん）が父・平井年春さんを偲んで発表され、講報に掲載されていましたので、ここに再掲させていただきます。

私がこの源立寺にご縁がありましたのは、中学二年の時です。両親が創価学会員として入信したからです。その頃より、父（注・平井年春氏）は大変に創価学会の組織を嫌っておりまして、そのせいか、私は中等部、高等部、女子部と学会活動をしませんでした。「信心は寺でするものだ」と、父はよく言っておりました。母は、やれ文化祭だ、会合だと学会活動に走り回っておりましたが、父は一人静かに日蓮大聖人様の御書を、毎日のように勉強しておりました。そのおかげで私は、高校受験など大事な時は一人、源立寺で題目をあげておりました。

そんな父でしたから、ご僧侶がみえた時には盛んに教学の質問をし、私もよくその場におり、お話をお聞きしました。当時、両親と縁のあったご僧侶が、よく家に来られていたのです。でも、まだまだ大聖人様の本当のお心は分かっておりませんでした。

ある晩、今は岐阜の正覚院・松田銘道ご尊師と、今里の伝正院・坂口麗道ご尊師のお二人が来られ、

「栄子さん、今の創価学会の教えは間違っていますよ。すぐに創価学会をやめて、源立寺につきなさい」

と言われました。私はすぐに脱会することにして、夜が明けると源立寺の前のご住職向島ご尊師のもとへ行きました。

その後すぐに、父にいきさつを話しましたところ、しばらく黙っておりましたが、もともと創価学会の組織のあり方に疑問を持っておりましたので、両親ともにすぐに納得し、脱会して家族全員が源立寺の檀徒として入信することができました。昭和五十二年の正信覚醒運動が始まった初期の頃です。

その後は、育児に追われる私よりも両親の方が熱心で、毎日のように源立寺に足を運び、向島ご住職のもとで頑張っておりました。

ところが大変なご心労だったのでしょう、昭和五十四年三月に三十九歳という若さで、突然に向島ご住職が他界されました。

またその年は、七月二十二日に日達上人猊下が御遷化されました。その時の創価学会のはしゃぎようは言うまでもありません。

あまりにも大きくなり過ぎた当時の創

価学会に、父の「これからの正信会はどうなって行くのだろう？」という言葉が、今も耳に残っております。

しかし、信心は数の力ではないのです。千葉県より菅野ご住職がさっそうといらして、父は前にもまして一生懸命でございました。本当に心より待ち望み、日に日に変わって行く源立寺の中で、ずいぶん苦しいけれど生きがいのある毎日を送っていたようでした。

その間、私といえば、一人息子のためにと、蔵の財に目が向いて、信心をおろそかにする数年が続きました。父の、「栄子、お寺だけは離れたらダメだよ」という言葉に、（わかった、わかった、でも仕事が忙しいもの）と、心の中でつぶやき、月に一度のお講と、大きな行事だけには顔を出すという信心でした。その結果、仕事の方では、店を出すことができました。しかし父は、お店を出したことよりも、お寺で私や息子の姿を見かける時の方が、本当に嬉しそうでした。

私が仕事で源立寺に行けない時には、孫の手を引いてよくお寺に連れて行く父でした。私も息子がお腹にいる頃までは、よく母とご僧侶のもとへ通いましたが、仕事を始めてからは、蔵の財ばかりを求めるように変わっておりました。そんな私を大聖人様はじっと見ていらしたのでしょう。

仕事は古美術商としては大きな店を開いていた私ですが、三年目のある日、見事に同業者にだまされて、借金まで背負わされてしまいました。創価学会の人が聞けば、手をたたいて喜ぶかも知れません。

ところが、その間に父が突然脳梗塞で倒れ、救急車で病院に運びこまれたのでした。

最初は、自分の名前さえも言えぬ状態であったのに、翌日には家に帰らせてくれと強引に退院して帰宅したのです。戦地でマラリアにかかって、少し後遺症があり、もともと丈夫な方ではありませんが、元来医者嫌いで、少しも不調を訴えたことのない気丈な父でした。

自宅へかえるとすぐざま、

「源立寺へ行くから着替えを」

と言うのです。体を気づかって母と私が止めますと、

「なんで寺に行くのが悪いんだ？」

と叱りとばされ、私はしかたなく後からついてお寺に行きました。杖をついて池田の駅をゆっくりと歩く父の姿が、今も目に焼きついています。

父は以前から大聖人の教えは何か違うぞと、ご住職から何でも学ぼうとしていましたが、病で倒れたあと、後遺症もほとんど回復して、ますます真剣に、お寺へお寺へと足を運んでおりました。

そしてついに三度目の発症に倒れました。父の体はもう手がつけられない状態でしたが、意識だけは今までの中で一番しっかりしていました。

その十日後に父は他界しました。

私は入院していた十日間、毎日のように病院へ行きました。父の好きだったものを毎日持って行くこともできました。なんという楽しい日々であったことでしょう。そして平成二年三月八日、午前八時十八分に父は息をひきとりました。

その時、母も私も息子もそろって、父の前で題目を唱えることができました。また、すぐにご住職にお知らせして「しっかりお題目を唱えてあげなさい」とい

うお言葉をいただきました。父の顔は雪のように真っ白く、半眼半口で、病気で苦しんでいた時よりも、よほどきれいな顔でした。今にも起き上がって「栄子、何をしているんだ」と、呼びかけてくれるような顔でした。

十日間ずっと泊まり込みだった母は、急いで家を片付けに戻りました。息子と霊安室に残った私は、父の顔を見ながら（生きているのにどうしてこんな狭い所にいるんだろう？）と、混乱するほどにその顔はきれいで、体はあたたかく、笑っているようでした。

霊安室の中には病院で用意してある、他宗の赤い仏画の掛け軸が飾ってありました。私は息子に「耕作、これはお父さんが一番嫌がると思うから、はずして」と言いますと、息子は「分かった」と言って、看護婦さんが「これははずせません」と言うのも聞かずに、一人ではずしてくれました。小さい頃から父が手をひいて、お寺に連れていった孫の手によって、その掛け軸はまるめられました。

私は母が持って来ていた数珠を父の手に掛け、息子と二人でお題目を唱えることができました。それは、今まで一番心配をかけた娘と、とても可愛いがってもらった初めての孫と、いまは亡き父との三人の一番大切な時間でした。私も息子も、このことは一生忘れないでしょう。

さらには、たまたま源立寺にご用があってみえた、伝正院の坂口麗道ご住職も病院にかけつけて下さり、父の顔を見るなり「平井さん、きれいな顔ですね」と胸元から小さいタオルを出して、枕に当てがって下さいました。私はなんと父は幸せな人だろうと思いました。はたして私はこういう死に方ができるだろうか。自分が死んでから、ああしてくれ、こうして欲しいとは言えません。

父の最後の姿を見た時、私の今までの信心は間違っていた、大聖人の教えに反していたと気づきました。毎日毎日、我を忘れて仕事仕事とかけづり回っていた私。題目を心より唱えていなかったはずです。私は不肖な娘でしたが、死に向かう父の姿を見て感じました。「ああ、この信心は何か違うんだ。この信心で成仏が叶うんだ」と確信しました。私も父のように成仏をしたい、父のように信心しなければいけないと痛感しました。

この時より、私はご住職の言葉を一つ一つかみしめ、できる限り塔婆供養をして、父親に孝行をしようと思いました。大聖人様が「蔵の財、身の財より、心の財第一なり」と仰せのように、これよりは信心を第一に、一生懸命やろうと心に誓いました。父の何分の一できるか分かりません。でも、大聖人様のお心に少しでも近づこう、と思いはじめました。

一周忌、三回忌とその間は、私の今までの信心のいたらなさのツケがまわってきて、やれ裁判だ弁護士だと、人のしない苦労が次から次へ、これでもかこれでもかとやってきました。もう疲れて死にたいな、と思ったこともありました。でもこんな死に方をしては、父が悲しむ。生きている間に、一遍でも多くの題目を唱えようと頑張りました。平井さんの娘が・・・と人から笑われないように、また息子からも、おふくろは何も残すものが無かったが信心だけは頑張った、と言われるようになりたい。大聖人の教えを真に受け継いでいる正信会を、自分も守っていこう、と思ってもらえるような信

心ができなければ、何のために息子と二人で父の死を見守ったのか分かりません。父がこの信心によって必ず成仏が叶う、と証明してくれたのに、娘がこんなことではいけない。そう自分に言い聞かせて、苦しい時には、弟が川西中央霊園に建てた父のお墓に行き、裁判の日にはお寺でご祈念していただき、ずいぶんとご住駿にはご心配をおかけしました。

まる三年ほどで、億に近い借金も三分の一ほどになり、ようやく返済のメドもたちました。お金お金と走り回っていたのに、今はそんなにあくせくしなくても、不思議と月末になれば月々の返済ができています。

人は必ず死を迎えます。莫大な財産があっても、地位や名誉があっても、誰でもいま生きている人達は、必ず死を迎えます。それは平等なのです。冗談のようですが、莫大の下に土を書くと墓という字になります。莫大な財産があっても土の下までは持って行けません。大きなお墓を建てても、間違った信心をしていれば、成払は叶いません。そう思うと、私はまだまだいたらない信心ですが、こうして値いがたき御本尊様に巡り値い、よきご僧信に巡り会い、正信会の法華講の一人として、本当の大聖人様の教えを受持できる幸せに、嬉しさと有り難さで一杯です。

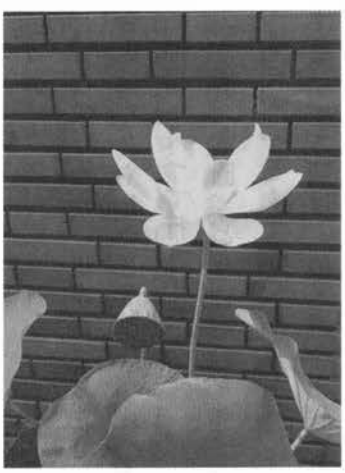
ここにこうして集い、法門を聴き、題目を唱えることができています。しかし、これをどんなに望んでも、手に入れられない人々もいるのです。正しい信心だからこそ、簡単に手に入れることができないのかも知れません。

私はこの末法において、なかでも本物の信心にめぐりあえた、このありがたさを、もっと身に感じて、毎日を暮さなければと思っています。

大聖人様が予言された世相のように、いまや世界中で戦禍の火が燃え盛り、日本においては政治や教育、宗教までも腐敗し、人々は人間の形はしていますが、姿形ばかりの人が氾濫しています。この混乱しきった世の中で、創価学会でもなく、新興宗教でもない、正信会にて題目を唱えられる。これ以上の幸せはありません。それが、父の死によってやっと感じるようになりました。これから先は何があっても御本尊様に感謝して、少しでも大聖人様の教えを汚すことなく、日々新たにご住職について、信心に精進していこうと思っています。

今もまだ、毎日仕事で出歩いてはおりますが、寒い時には寒さを感じながらも春の陽射しをみつけて「あぁ、生きていて良かったなぁ。今日も一遍の題目が唱えられるなぁ」と、今ごろはそう思えるようになりました。臨終の時のことを考えれば、もう何も恐くありません。

親の姿を見て子供は信心を学びます。まだまだ未熟な信心ですが、尊い父の残したもの、さらには母のたゆまぬ信心を見習って、大聖人様のお心に少しでも近づくよう、頑張ります。つたない話ですがご静聴ありがとうございました。



大石寺（おおいしでら）の和尚

大石寺の和尚は、檀家から食物を貰ふと、いつもひとりでばかり喰べてゐました。

ある日のこと、串柿をたくさん貰ひました。いつものやうに和尚は、押入の中へしまひこんで、お勤めの暇々に喰べてゐました。

お寺に方圓といふ小僧がゐました。

お寺に方圓といふ小僧がゐました。

方圓は、和尚さんが串柿を喰べてゐるのを見つけて、どうしても喰べたくてなりません。

和尚は、方圓に見つかると、あわてて、押入に串柿をしまひ込み、

「おい、方圓、この柿は毒柿だよ、これを喰ふと腹が痛んで、しまひには死んでしまふのだよ。」

と、いひました。

それでも、方圓は、和尚がおいしさうに喰べてゐたのを見てゐるので、喰べたくてなりません。いつかはこつそり盗み出して喰べてやらうと考へてゐました。

間もなく、和尚は、村へ出て行きました。

方圓は和尚の姿が見えなくなると、押入をあけました。

おいしさうな串柿が、三串も四串もありました。

一つ喰べ、二つ喰べしてゐるうちに、方圓はすつかり喰べてしまひました。

明り窓のところには、机があつて、机の上には、和尚が、よその人が来ると、いつも自慢して見せる端渓の硯が置いてありました。

方圓は、この硯を手にとつて見ました。硯には月の模様があります。

しばらく見てゐた方圓は、硯を鉄の火箸で割つてしまひました。

硯をこはしてから、方圓は、自分の部屋へ帰つて、布団を出して寝てゐました。

布団の中へもぐり込んで、和尚が帰つて来たら何といはうかと考へてゐるうちに、間もなく和尚が帰つて来ました。

「方圓、方圓。」

と、呼びましたが、返事がありません。

和尚は、あやしいと思ひながら、方圓の部屋へ入つて行きました。

「方圓、方圓、どうしたのぢや。」

と、布団へ手をあてていひました。

すると、方圓は、泣き声を出して、

「大事な大事な硯をこはしてしまひました。それで申わけないので死んでしまはうと思つて、押入の中の毒柿をみんな喰べ、死ぬのを待つてゐるのです。」

と、いひました。

和尚は、硯はこはされ、柿は喰べられてしまつたので、ぽかんとしてゐました。

方圓は、心の中で、

「この嘘つき和尚、いい気味だ。」

と思ひながら、いつまでも、いつまでも布団の中にもぐり込んでゐました。

（『建國童話讀本　4（昭和7年10月発行）』より）

恵日だより

【案内・お知らせ】

＊盂蘭盆会の案内とお願い

本年の盂蘭盆会は、八月十五日（金）午後一時から奉修いたします。

また、十三日（水）のお講においても、ご回向いたしますので、ご希望の方はご参詣ください。

なお、お塔婆の申し込みは、なるべく法要当日を避けて、事前のお申し込みをお願いいたします。

また、秋のお彼岸のお塔婆も受け付けていますので、受付までお申し込みください。

【訃　報】

〔大阪地区〕大阪市

真照院妙覚信女　六月七日寂

俗名大西照子之霊　行年九十五歳

この度、右の法華講の方がお亡くなりになりました。

謹んでご冥福をお祈りします。

【葉月詠草】

〔和　風〕

美しく　耕地整備の　すみし田に
うっすら草萌え　命息づく

長男は　クラブの取り決め　守るため
悩み惜しみてス　ポーツ刈りする

【恵日俳壇】

〔農　婦〕

戸を引けば念仏唱ふや夏蛙
百ヵ日珠数をたぐれば昼の虫

〔吉田　裕〕

不機嫌な日やまひまひの奔放に
まだ少し眠りたらざる山桜桃
花過ぎし南円堂のうす埃

恵日　八月号　通巻三五七号　令和七年八月一日発行（毎月一回一日発行）　編集兼発行人　菅野憲道　発行所　〒563-0057　池田市槻木町一－一〇　源立寺内　恵日編集室　購読料（含送料）　年間二〇〇〇円

八月の行事

一　日（金）　午後二時　**お経日**

三　日（日）　午前九時　**講中勤行会・幹事会**

八日（金）～十四日（木）　**お盆棚経**

十三日（水）　午後一時　**お講・役員会**

十五日（金）　午後一時　**盂蘭盆会**

九月の行事

一　日（月）　午後二時　**お経日**

七　日（日）　午前九時　**講中勤行会・幹事会**

十三日（土）　午後一時　**お講・御難会・役員会**

二十三日（火）　午前十時　**秋季彼岸会**

ご案内　お知らせ

棚経を希望される方は申し込みを

お盆の棚経は、希望者のお宅にのみ伺います。希望される方は受付にお申し出ください。

まだ受け付けが可能な日時もありますので、お問い合わせください。

また、お盆の塔婆供養の申し込みは、なるべく早くお願いします。

恵日　令和七年八月号　通巻三五七号
令和七年八月一日発行
編集兼発行人　菅野憲道
発行　恵日編集室
〒563-0057　池田市槻木町一－一〇　源立寺内
TEL（〇七二）七五一－二二二五
E-Mail　kaimo@wombat.zaq.ne.jp
購読料（含送料）　年間二〇〇〇円
加入者名　恵日編集室会計
振替口座番号　01380-2-126449